故郷 (5)

ある寒い日の午後、私は食後の茶でくつろいでいた。表に人の気配がしたので、ふり向いてみた。思わずアッと声が出かかった。いそいで立ちあがって迎えた。

来た客は閏土である。ひと目で閏土とわかったものの、その閏土は、①私の記憶にある閏土とは似もつかなかった。背丈は倍ほどになり、昔のつやのいい丸顔は、いまでは黄ばんだ色に変り、しかも深い皺がたたまれていた。眼も、かれの父親がそうであったように、まわりが赤くはれている。私は知っている。海辺で耕作するものは、一日じゅう潮風に吹かれるせいで、よくこうなる。頭には古ぼけた毛織りの帽子、身には薄手の綿入れ一枚、全身ぶるぶるふるえている。紙包みと長いきせるを手にさげている。その手も、私の記憶にある血色のいい、まるまるした手ではなく、太い、節くれ立った、しかもひび割れた、松の幹のような手である。

私は感激で胸がいっぱいになり、しかしどう口をきいたものやら思案がつかぬままに、ひとこと、

「ああ閏ちゃん――よく来たね……」

つづいて言いたいことが、あとからあとから、数珠つなぎになって出かかった。角鶏、跳ね魚、貝がら、猹……だがそれらは、何かでせきとめられたように、頭のなかをかけめぐるだけで、口からは出なかった。

かれはつっ立ったままだった。喜びと寂しさの色が顔にあらわれた。唇が動いたが、声にはならなかった。最後に、②うやうやしい態度に変って、はっきりこう言った。

「旦那さま！……」

③私は身ぶるいしたらしかった。悲しむべき厚い壁が、ふたりの間を距ててしまったのを感じた。私は口がきけなかった。

かれはうしろを向いて、「水生、旦那さまにお辞儀しな」と言って、かれの背に隠れていた子どもを前へ出した。これぞまさしく三十年前の閏土であった。いくらか痩せて、顔色が悪く、銀の首輪もしていない違いはあるけれども。「これが五番目の子でございます。世間へ出さぬものですから、おどおどしておりまして……」

（竹内好訳『魯迅文集Ⅰ』筑摩書房　所収「故郷」による。一部表記を変えた箇所がある）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「私の記憶にある閏土とは似もつかなかった」について、次の各選択肢を、『私』の記憶にある閏土」と、「現在の閏土」に分け、記号で答えなさい。

ア 顔はつやのいい丸顔である。
イ 顔には深い皺がある。
ウ 眼のまわりが赤くはれている。
エ 手は血色がよく、まるまるしている。
オ 手は太く、節くれ立ち、ひび割れている。

「私」の記憶にある閏土〔　　〕
現在の閏土〔　　〕

(2) ――線②「うやうやしい」の意味を選びなさい。

ア 親しみがあり、誠実なさま。
イ 遠慮がなく、ぶしつけなさま。
ウ 若くて、物事に慣れていないさま。
エ 相手を敬い、丁重にふるまうさま。

〔　　〕

(3) ――線③「私は身ぶるいしたらしかった」とあるが、このときの「私」について正しく述べているものを選びなさい。

ア 身分や境遇の違いの中で自分と閏土が隔てられてしまったことに強い衝撃を受けている。
イ 思いがけない閏土の言い方によって、自分と閏土の立場の違いを思い出している。
ウ 閏土が自分の記憶にある姿と異なることに驚き、時間の流れを改めて感じている。

〔　　〕